

はじめに

考古学とは人類の製作した「モノ」から歴史を究明する学問であることは論を待たない。かつては物質的な歴史のみに有効だと考えられていたが、現代では「モノ」から人間の精神史まで読み込むことすら可能である。

そうした考古学は対象とする時代を限るものではないが、原始・古代という文字史料のない時代にのみ有効な研究であると認識された時代が長く続いた。そして、文字史料が増えるにつれて、その補助学的な研究と位置づけられてきた。

それが20世紀後半に鎌倉、一乗谷朝倉氏遺跡、草戸千軒町遺跡、博多などが発掘調査され、多大な成果を得たことにより、中世考古学という分野が確立された。さらに、高度経済成長による山をも飲み込む開発に各地で中世城館遺跡の発掘が実施され、遺構や遺物が出土した。列島全域に分布する城館遺跡は戦国時代を代表する遺跡であり、文字史料以上に地域の戦国史を物語る資料であることが認識された。

こうした歴史考古学の流れから、高志書院より『戦国時代の考古学』（2003年）、『中世城館の考古学』（2014年）が編まれた。その内容は以後の中世考古学の指針となり、現在もまったく色褪せていない。

ところが、近世になると急速に考古学の有効性が認められなくなる。たとえば文化庁が周知の遺跡としての捉え方について、基本的には中世までとし、近世は地域にとって重要と位置づけられるものに限っている。

その近世遺跡の評価を大きく変えたのが江戸遺跡であった。1980年代のバブル経済は東京をはじめとする大都市の再開発を促進した。東京では開発に伴う事前調査によって武家屋敷から町屋まで多くの発掘調査が実施され、その結果、近世の江戸を対象とした江戸遺跡研究会が1986年に発足した。

江戸時代に諸大名は参勤交代制度により国許と江戸を行き来することとなる。そのため江戸藩邸には国許からの陶磁器が持ち込まれ、国許では江戸からさまざまな物資が持ち込まれた。江戸の考古学研究は江戸の遺跡だけではなく、各地の近世遺跡の調査によって国許と江戸の交易を明らかにした。ここに近世考古学が確立したのである。

近世城郭は近世遺跡の中心をなす遺跡である。しかし、近代以降の城郭観は天守閣であった。一般的には城イコール天守閣というイメージが強い。さらに近世城郭は建築施設(作事)という認識が大方を占め、その研究は建築史が主流を担ってきた。

ところが、軍事施設としての近世城郭は実は土木施設(普請)であった。それを最もよく示しているのが正保城絵図である。正保元年(1644)に幕府は諸藩に命じて城絵図の作成と提出を命じた。江戸城紅葉山文庫に収められた絵図は現在国立公文書館に63枚が残され、重要文化財に指定されている。

その特徴は、石垣の高さ、長さ、堀の幅と深さなど普請について詳細に記載している点である。一方の作事は、天守や櫓は描くものの御殿などは描かれず、普請を描くことに重点を置いて作成された絵図であ

ったことがわかる。これは江戸幕府が城郭は土木施設としての軍事施設であると認識していたことを端的に示している。

実は、残された近世城郭で建物を残す城跡は極めて少ない。大半の城跡は石垣や堀が残されているに過ぎない。発掘調査によって残された石垣の基底部分が明らかにされ、石垣の工法が判明した。さらには、その構築技法によって近世城郭の石垣が詳細に編年できるようになった。土木施設である近世城郭の実態は発掘調査によってようやく解明されたわけである。

しかし、一方で近世城郭に対する考古学的な調査方法は、全国的に統一化されたものは示されていない。それぞれの城跡ごとに調査はなされているものの、同一組上で分析される場もまだまだ少ない。そうした現状において全国的事例を一堂に集成することが急務となった。そこで編まれたのが本書である。

第1部では近世城郭を理解するために中世から近世にかけての代表的な城郭である芥川城跡・飯盛城跡、安土城跡、豊臣期大坂城跡、小田原城跡を取り上げて論じた。

第2部では中世の城が同じ場所でどのように近世城郭へ改変されるのかを岡山城跡、高槻城跡、小倉城跡、高崎城跡、躑躅ヶ崎館跡から論じ、さらに全国からの事例報告を取り上げた。

第3部では近世城郭の新機軸として和歌山城跡の石材、萩藩の城郭瓦、陣屋の縄張り、松前城跡の変遷から論じ、全国的に事例を集めた。

第4部では城下町の設計と技術という視点から松江城下町の造成と江戸の上下水道を取り上げ、全国的な事例報告を集成した。

第5部では幕末の築城についての事例を紹介した。

さて、現代では近世城郭の研究にとって考古学的手法は必要不可欠である。しかし、考古学からだけで分析することはできない。そこで、第6部では特論として文献史の立場からと絵図研究の立場からの視点を紹介した。

本書だからこそ、これだけの各論と事例報告を集成できたものと自負している。今後の近世城郭の考古学の基礎文献として長く利用されることを願ってやまない。

2025年5月

中井 均

目 次

はじめに ————— 中井 均 i

第 1 部 近世城郭の黎明—織豊期の特性を把握するために—

三好長慶の居城—芥川城・飯盛城を中心に— ————— 中井 均 3

近世城郭の黎明としての安土城 ————— 畑中 英二 17

豊臣期大坂城 ————— 市川 創 29

小田原城の総構(大構)と障子堀—遺構と史料の接点— ————— 佐々木 健策 39

第 2 部 中世的世界の改変

居城の改修と機能変化—備前岡山城の事例から— ————— 乗岡 実 51

高槻城と周辺空間の変遷 ————— 中西 裕樹 61

近世城郭への改修過程—小倉城の事例から— ————— 岡寺 良 73

箕輪城から高崎城の移城にみる近世化 ————— 秋本 太郎 83

躰躰が崎館—戦国期居館から近世城郭へ— ————— 佐々木 満 93

※事例報告

山形城跡…104 若松城跡…106 二本松城跡…110 宇都宮城跡…114 川越城跡…118

小田原城跡…122 飯山城跡…126 松代城跡…130 松本城跡…134 高遠城跡…138 飯田城跡…142

小諸城跡…146 村上城跡…150 府中城跡…154 駿府城跡…158 掛川城跡…162 高知城跡…166

丸亀城跡…168 徳島城跡…172 佐賀城跡…176 金石城跡…180 杵築(木付)城跡…184

第 3 部 近世城郭の新機軸

和歌山城の石垣石材—多様性をさぐる— ————— 大山 僚介 191

萩藩(長州藩)成立期の城郭瓦—軒平瓦からみた支城の自立性— ————— 伊藤 創 201

陣屋の縄張り—城郭との違いと地域性— ————— 中西 裕樹 213

松前城の変遷 ————— 佐藤 雄生 223

※事例報告

弘前城跡…234 米沢城跡…238 小峰城跡…242 磐城平城跡…246 磐城平城本丸御殿跡…250
土浦城跡…254 新発田城跡…258 高田城跡…262 上田城跡…266 藤ヶ城跡(岩村田城跡) …270
高島城跡…274 甲府城跡…278 富山城跡…282 高岡城跡…286 丸岡城跡…290 福井城跡…294
小浜城跡…298 横須賀城跡…302 名古屋城跡…306 加納城跡…310 伊賀上野城跡…314
郡山城跡…318 和歌山城跡…322 淀城跡…326 二条城跡…330 徳川大坂城跡…334
伯太藩陣屋跡…338 篠山城跡…342 赤穂城跡…346 米子城跡…350 松山城跡…354 高松城跡…358
唐津城跡…362 熊本城跡…366 鹿児島城跡本丸御殿…370

第4部 城下町の設計と技術

沖積低地の城下町造成—松江城下町— ————— 松尾 信裕 377

江戸の上下水道 ————— 金子 智 387

※事例報告

江戸城跡…400 明石城跡…406 新宮城跡…410

第5部 幕末の城郭

※事例報告

五稜郭跡…416 松前藩戸切地陣屋跡…420 前橋(厩橋)城跡…424 小島陣屋跡…428
龍岡城跡(五稜郭) …432

第6部 特 論

近世城郭を生み出したモーメント(契機)とは何か ————— 白峰 旬 439

「正保城絵図」から見た松江城 ————— 稲田 信 449

執筆者一覧 460

おわりに ————— 加藤 理文 461